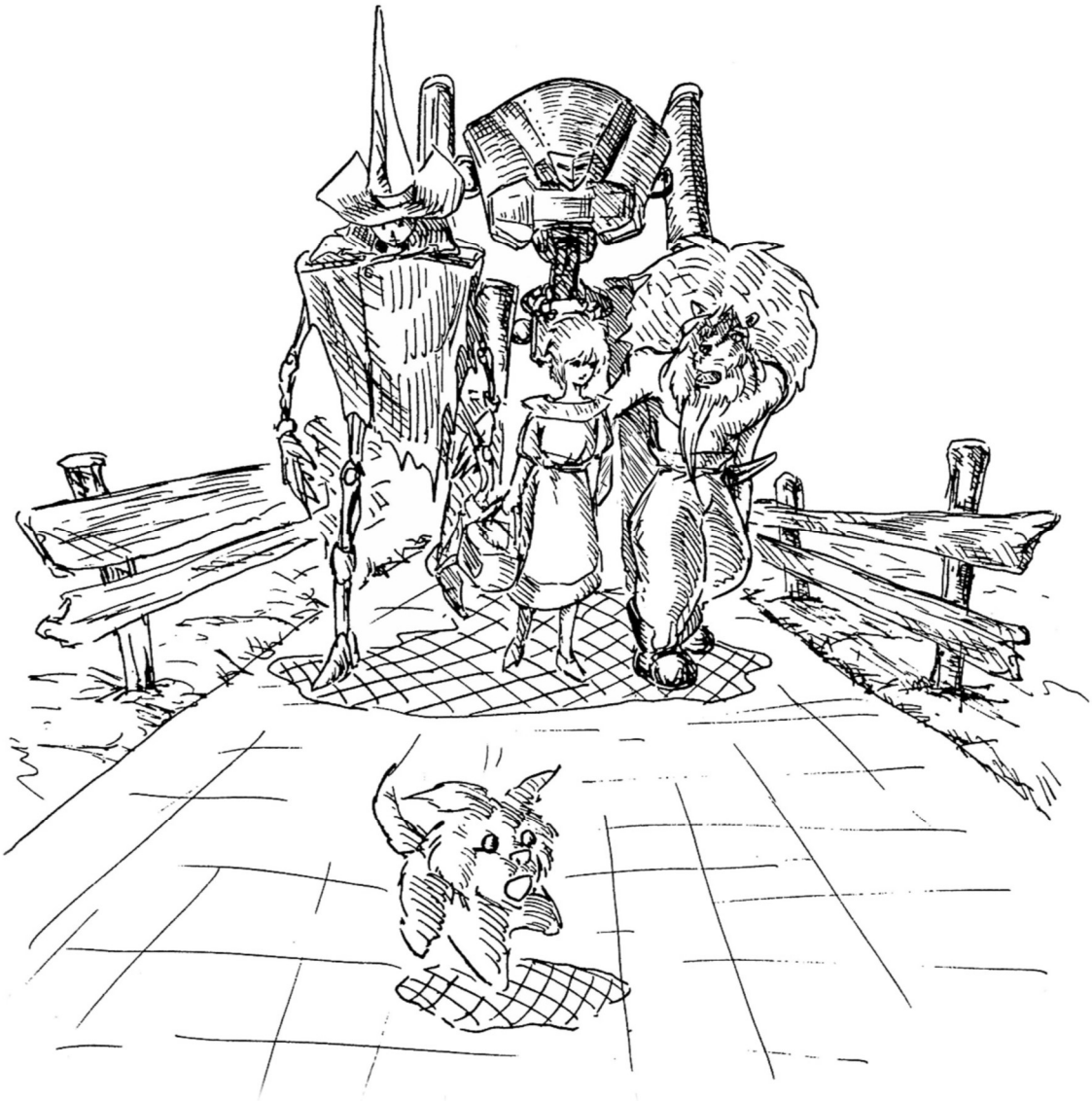
絵物語『オズの魔法使い』



烏帽子九郎

絵物語『オズの魔法使い』

原作：Lyman Frank Baum “The Wonderful Wizard of Oz”

ここはカンザス。

容赦なく照り付ける太陽に、草も木も全てが干からびた灰色の世界。

目に映る色彩と言えば、ごくまれに空にかかる七色の虹だけ。

そんな見渡すかぎりの平原に、丸太小屋がぽつりと一つありました。

小屋に住むのはヘンリーとエムの老夫婦、そしてみなしご少女ドロシーと小犬のトト。

この灰色に塗りつぶされた世界で、生き生きと鮮やかなのはドロシーとトトだけ。

ドロシーは空にかかる七色の虹を見るたびに、その向こうへ行ってみたいと思うのでした。

ある日のこと、空の灰色はいつもより一層濃密に、生温かい風が乾いた雑草を泣かせました。

老練なヘンリーは、それが何の前兆か、知りすぎるほど知っていました。

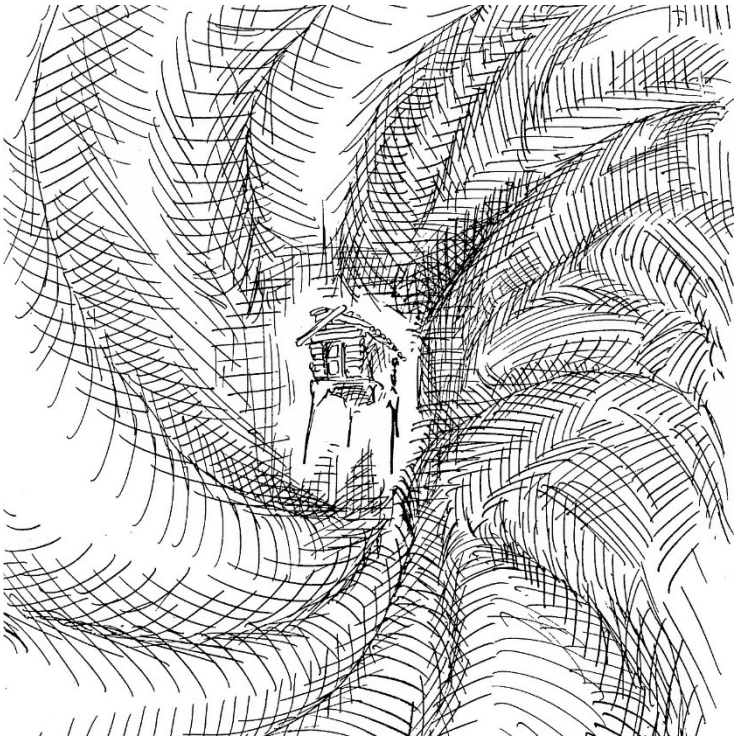
「竜巻がくるぞ、エム！」

エムは急いでドロシーの手を引き、避難用の地下室へ。

続いてヘンリーも地下室に入り、準備がすべて整った時、ドロシーはトトが部屋に置き去りになっていることに気付きました。

慌ててドロシーが地下室を飛び出すと、丸太の折れる音がめきめきと響きます。

小屋が浮き上がる感覚に、彼女は気を失いました。



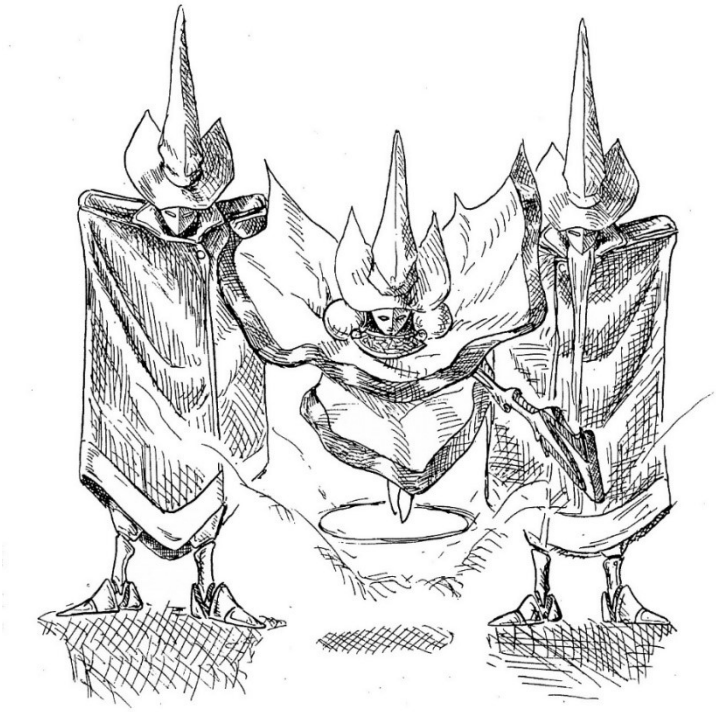
窓から差し込む柔らかな陽光と聞き慣れない小鳥のさえずり。

目をさましたドロシーがドアを開けると、そこは森の中でした。

竜巻はドロシーとトトを、美しい色彩に満ちた不思議の国にそっと運んだのでした。

呆然と立ち尽くすドロシーに、突然声がかかります。

「ようこそマンチキンの国へ！」



「気高い魔法使いよ、あなたが邪悪な東の魔女から我々を解き放ってくれたこと、心より感謝します」

　ドロシーがふり向くと、奇妙な三人が立っていました。

「我が名は北の魔女、後ろに控える二人はこの東の国の住人、マンチキン達」
「わたしは何もした覚えはありません。何かの間違いではありませんか？」
「見るがいい」

　北の魔女は小屋の下を指しました。
　そこからは銀色の靴をはいた何者かの足が二本、つきだしています。
　ドロシーが思わず悲鳴を上げると、二本の足は見る間に消えました。
　後には銀色の靴だけが残されています。
「なるほど」
　北の魔女は一人うなずいた。
「あなたはこの世界の人ではないようだ」
「その通りです！」
　ドロシーは慌てて返事をしました。

　北の魔女は教えてくれました。
　この「オズの世界」は、ドロシーたちが住む世界とは完全に隔絶された場所にあること。
　大きく東西南北の国と中央のエメラルドの都にわかれていること。
　東西の国には邪悪な魔女たち、南北の国には聖なる魔女たち、そして中央の都には偉大な大魔法使いオズがそれぞれ治めていること。
　竜巻によって飛ばされてきたドロシーの家は、偶然そのうちの東の魔女を圧しつぶしてしまったことなど。

「わたしはカンザスに帰らなければなりません」

途方に暮れたドロシーが、とりあえず頼れるのはこの北の魔女だけです。

「残念ながら私にはその力はない。しかしエメラルドの都の大魔法使いオズなら、あなたの願いをかなえられるかもしれない」

北の魔女は気の毒そうに言いました。

「エメラルドの都までの道のりは決して安全とは言えない。東の魔女を殺してくれたお礼に、あなたに私の力を貸し与えよう」

北の魔女は杖をドロシーの額にあてました。

「私の守護の印を持つ者に、手出しできる者はいないだろう」

ドロシーの心はあたたかい安心感で満たされました。

「この黄色いレンガの道を進むが良い。あなたはエメラルドの都に着くことができるだろう」

ドロシーは礼を述べた。

北の魔女は最後に「あの東の魔女の銀の靴はあなたのものだ。はいていきなさい」と言い残して消え、二人のマンチキンもどこへともなく走り去りました。

ドロシーの長い旅が始まりました。

ドロシーは黄色いレンガの道を進むうちに森を抜け、マンチキン達の広い農場に出ました。

それから数マイルほど先の畑の前で一休みしたときのことです。

「こんにちは！」

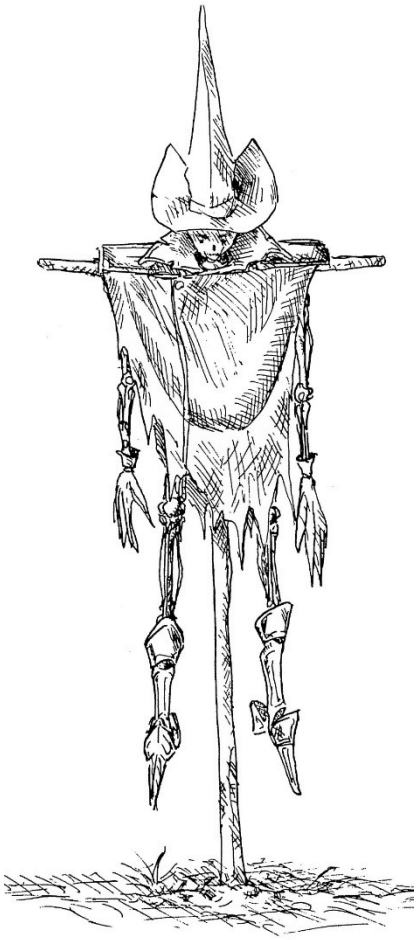
なにか変にカサカサした声が聞こえました。

ドロシーは口をぽかんと開けました。

「今、あなたがしゃべったの？」

ドロシーに話しかけたのは、目の前のかかしだったのです。

「お嬢さん、どうか私の背中のこの棒をはずしてくれませんか？」



　少し気味悪かったのだけれども、苦しんでいるようなのではずしてやりました。

「どうもありがとうございます。なんだか生まれ変わったみたいだ！」

　かかしはカサカサした声で礼を言いました。

「ところでどちらまで？」

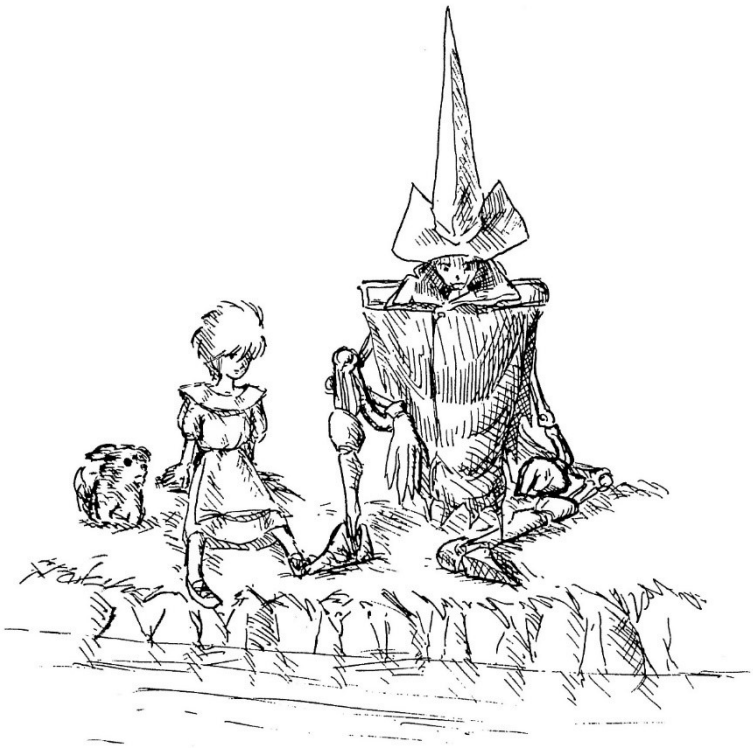
　ドロシーは自分がカンザスへ帰るためにエメラルドの都のオズに会いに行くと答えました。

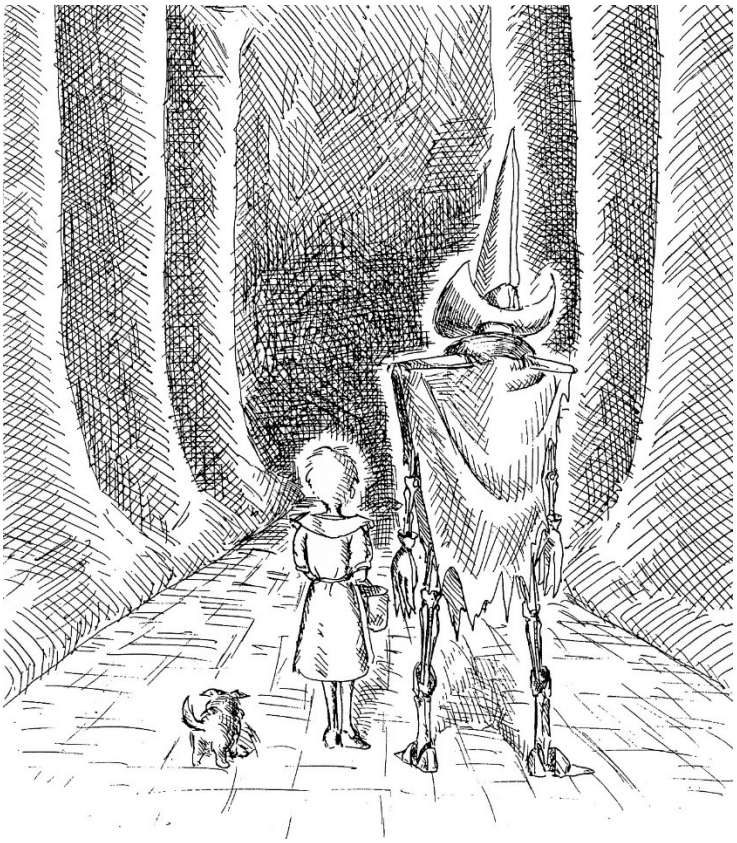
「私にはよくわかりません」

　かかしはすまなさそうに言った。

「何しろ脳ミソがないもので。ああ、世の中のことについてもっと深く考えることができる脳ミソが欲しいなあ。どうか私も、オズ様の所へ連れて行ってください」

　こうして一人と一匹の旅は、二人と一匹の旅になりました。





マンチキン達の農場を抜け、ドロシーとかかしとトトは薄暗い林の中へと入っていきました。

林に入るとすぐ、低いうめき声が聞こえてきます。

声に引き寄せられて歩いていくと、錆の浮いた地面の不気味な広場に出ました。

広場の端にはブリキでできた人間が、すっかり錆びついてうずくまっていました。

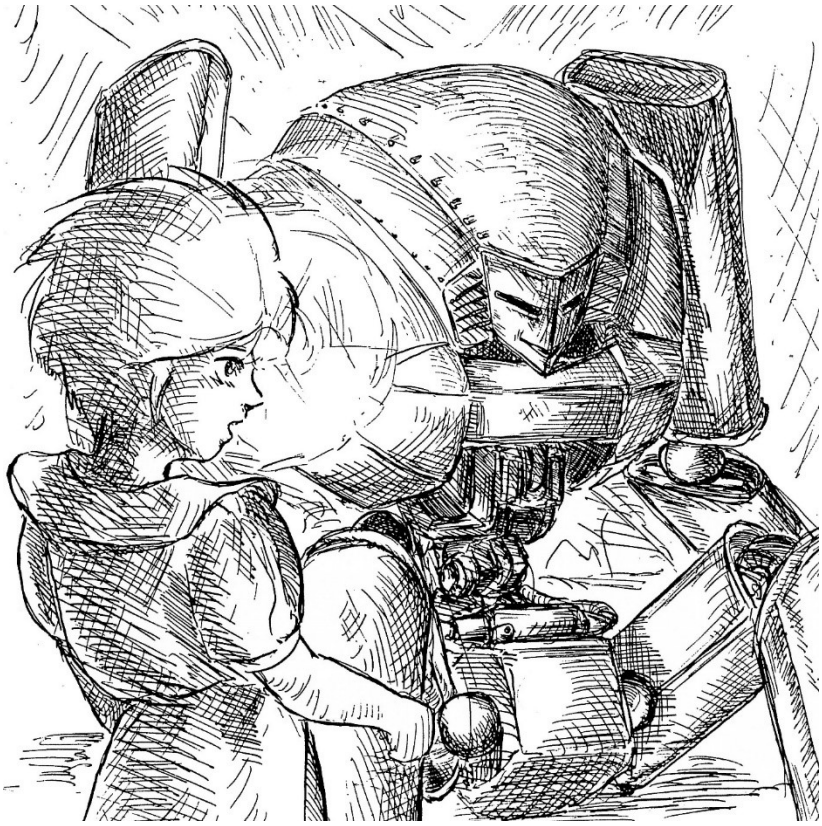
「少女よ、どうか私を救って欲しい」

うめきながら消え入りそうな声で言います。

「私は昔、木樵りだった。愛する人と結婚するために真面目に働き続けたのだが、悪い東の魔女に騙され、次々に五体を失って、ただ働くだけのブリキの体になってしまった。最後に心臓を失ってからは愛する人のこともよく思い出せなくなり、ついには錆びて動けなくなってしまったのだ」

ドロシーは困りました。

どうしたらよいのかわからなかったのですが、この苦しんでいるブリキ男をなんとか救ってやりたいと思いました。

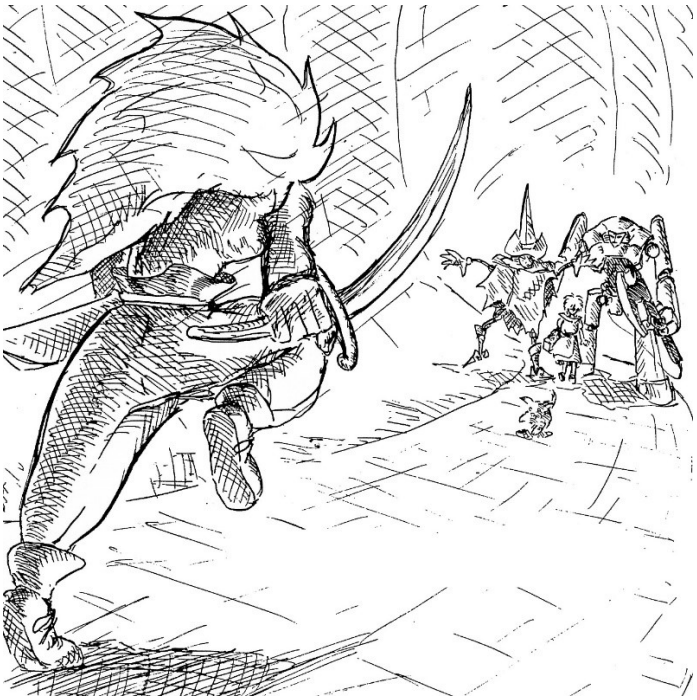


ドロシーはふと思いついて傍らに落ちていた油さしを使い、ブリキ男の錆びた体を動くようにしてやりました。

ブリキ男は礼を言い、ドロシー達が大魔法使いオズに会いに行くことを聞きました。

「できることなら私も、もう一度人間らしく感動することのできる熱い心臓が欲しい。私を一行に加えてもらえないか？」

こうして二人と一匹の旅は、三人と一匹の旅になりました。



ドロシーと仲間たちが再び森にさしかかった時、咆哮とともに大きなライオンがおそいかかってきました。

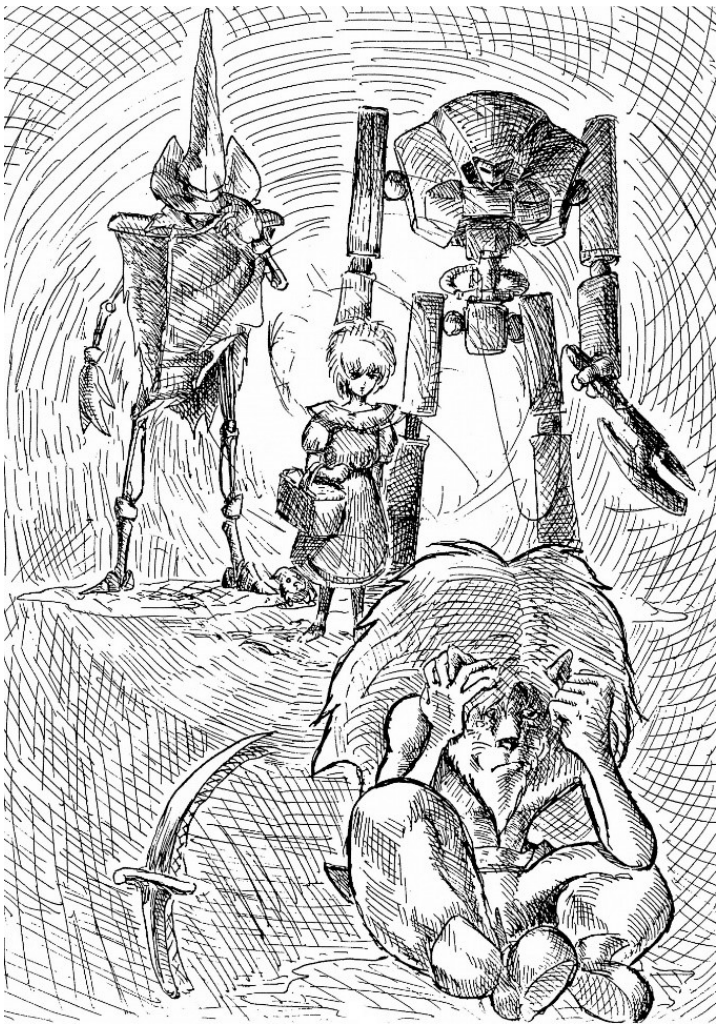
小さいトトを護りたい一心でとっさドロシーが叱りつけると、ライオンは飛び上がって驚き、ガタガタ震えはじめました。

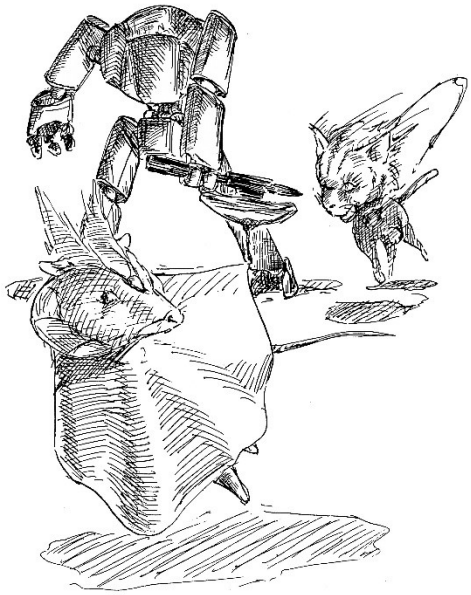
かわいそうに思って声をかけますが、少女が近づくたびにライオンは震え上がるばかり。

ライオンが落ち着いてから、ドロシーは自分たちがエメラルドの都に向かう途中であることを話しました。

「ぼくはとんでもない臆病者だ。このままじゃあ一生不幸なままだ。いつでも堂々としていられる勇気が、どうしても欲しい」

こうして三人と一匹の旅は、三人と二匹の旅になりました。





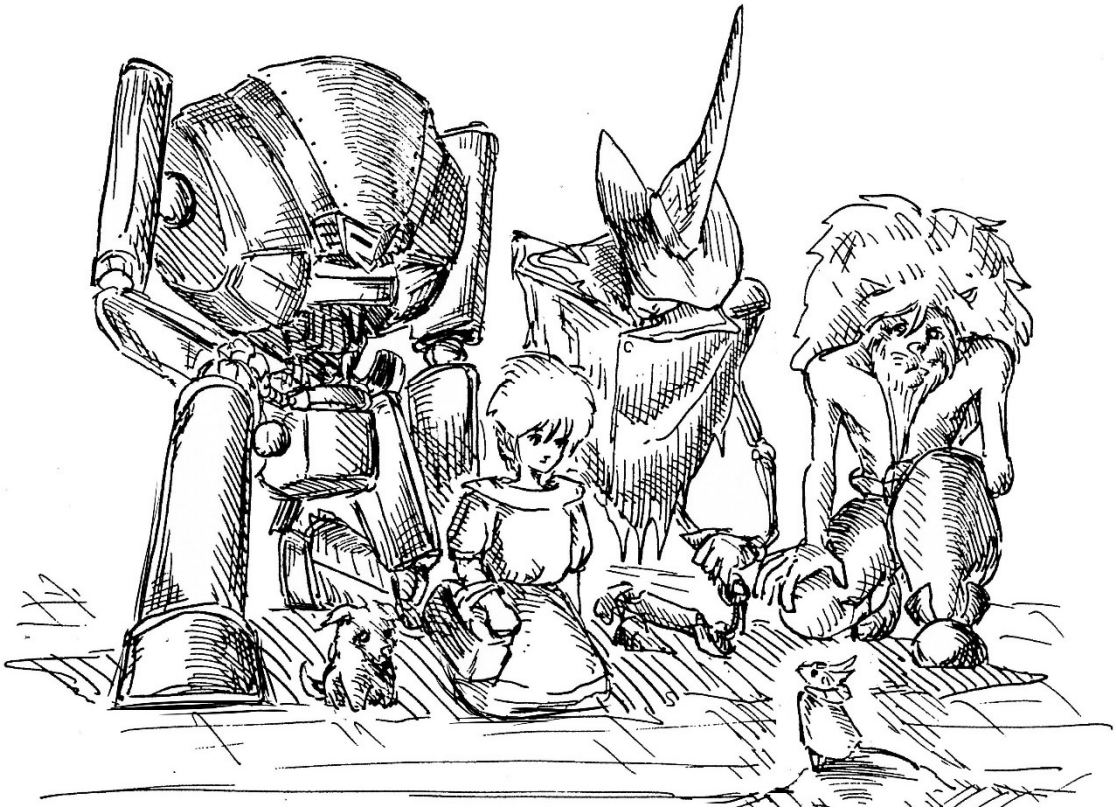
多くの苦難の道のりを越えると、辺りの景色が徐々に光量を増してきました。

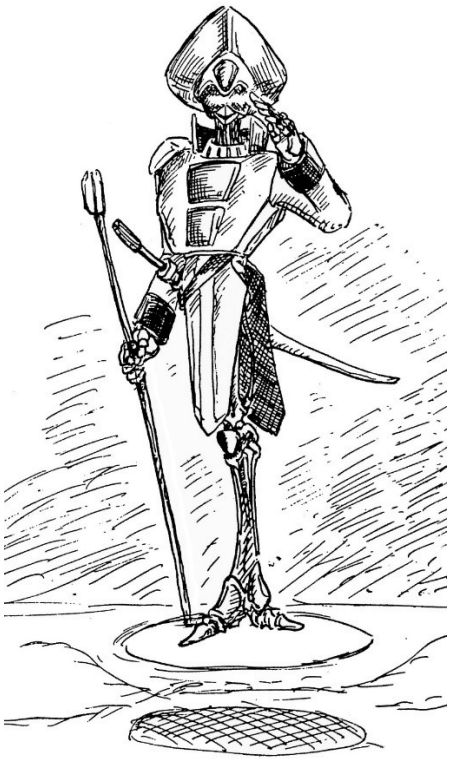
そろそろエメラルドの都が近いようだと話しながら歩いていると、小さな野ネズミが走り出してきて、そのあとを追ってヤマネコも走りだしてきました。

ブリキ男は斧を振り上げ、ヤマネコの首をはねました。

ブリキ男が助けたのは、野ネズミの国の女王でした。

彼女は「御用の時はいつでも呼んでください」と約束し、走り去りました。





一行はついにエメラルドの都に到着しました。

「外国から来られた方々じゃ！」

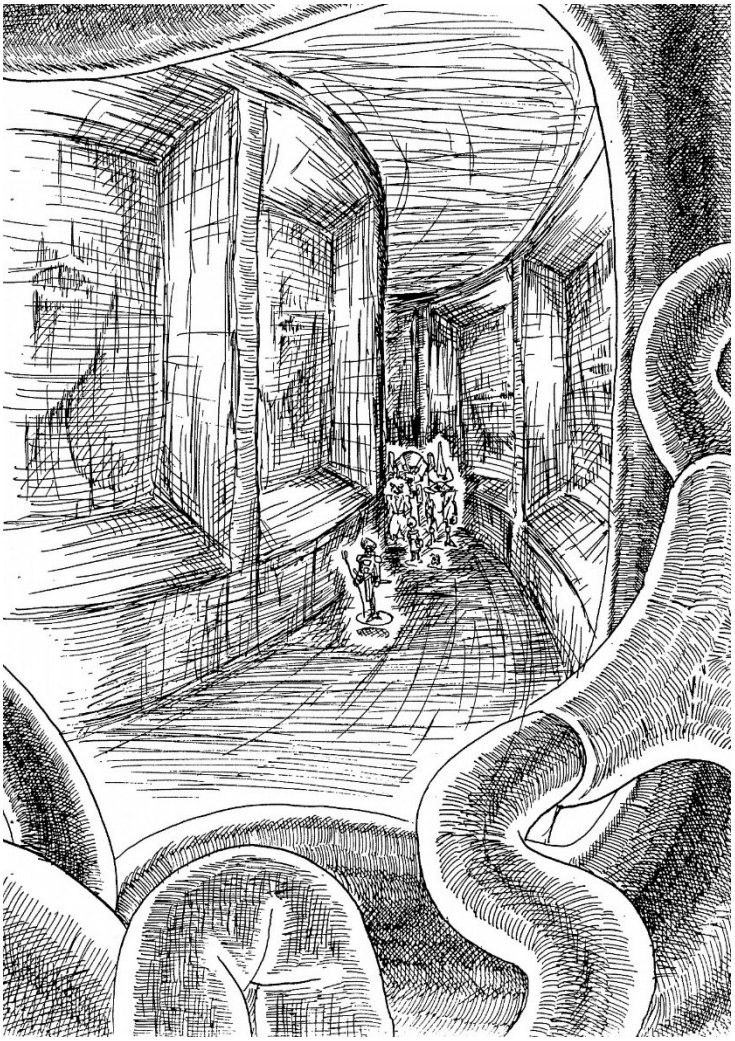
門番が兵隊に取り次ぎます。

「オズ様にお目にかかりたいそうだ！」

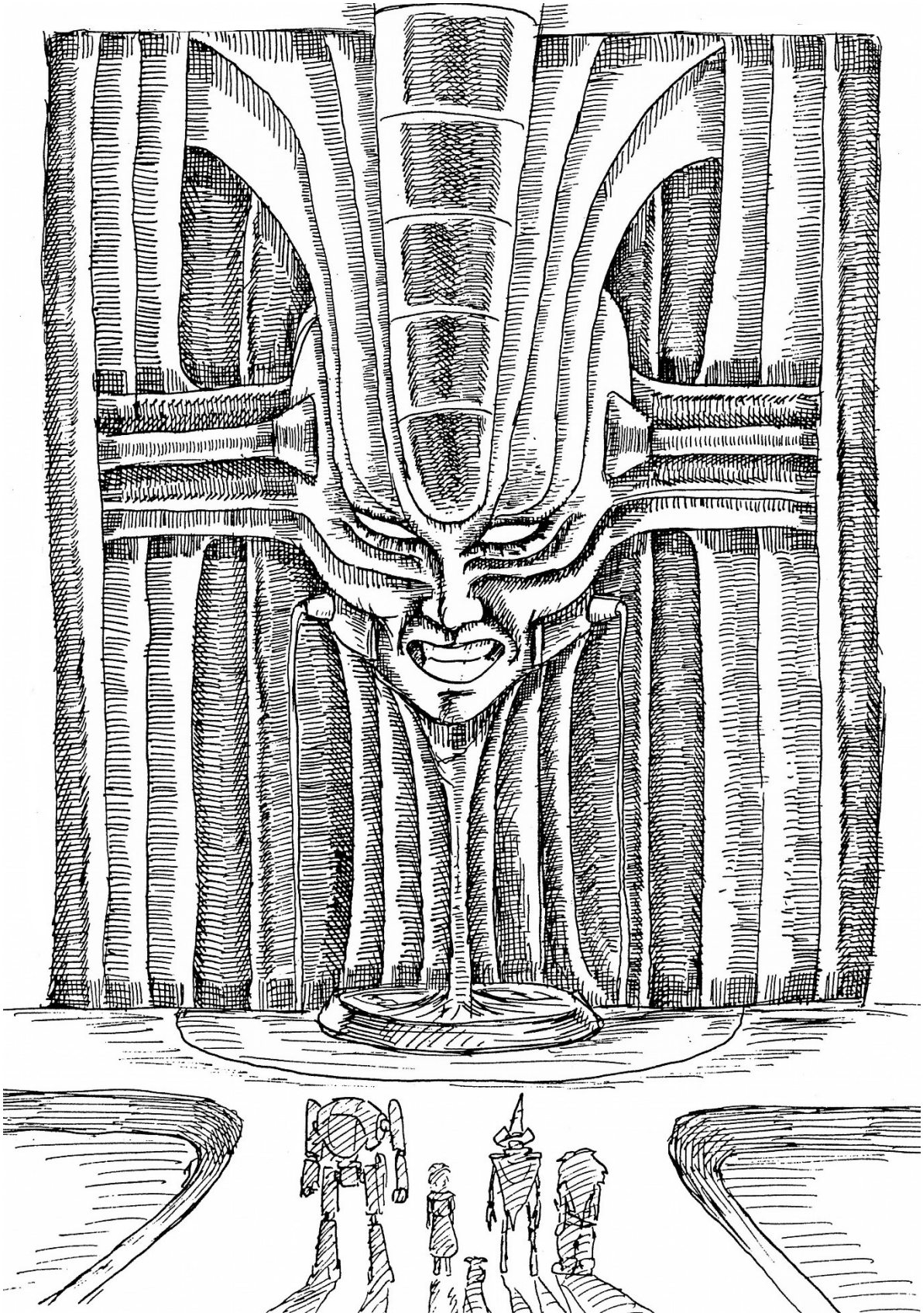
しばらくして兵隊は戻ってきて言いました。

「オズ様はあなたの額の印と銀の靴に興味を持たれ、謁見をお許しになりました」

ドロシーたち一行は、大魔法使いオズの部屋に案内されました。



そこで一行を待っていた「モノ」は……



「余は大魔法使いオズ。余に会いたいと申すはそなたらか！」

　三人と二匹にむけて、大きな声が響きました。

「望みを述べてみるがよい！」

　ドロシーとかかしとブリキ男とライオンは、それぞれの望みを言いました。

「カンザスに帰してください！」

「私には脳ミソを！」

「私には心臓を！」

「ぼくには勇気を！」

「かなえてほしくば一つ条件がある。それは邪悪な西の魔女を殺してくることである！」

　ドロシーは絶望しました。

　自分に人殺しなどできるはずがない。

　ましてや恐ろしい魔女など。

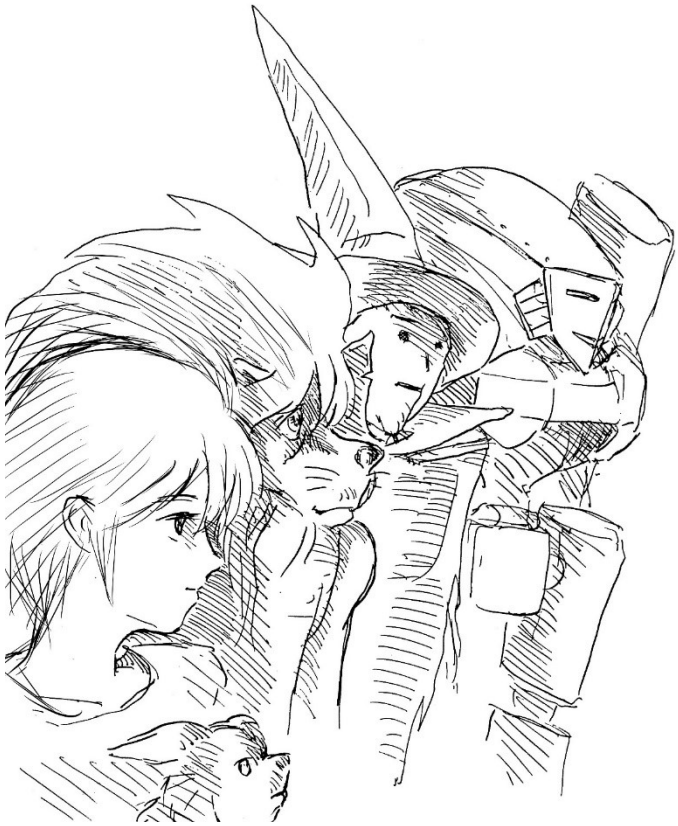
　せっかくの長旅が無駄になったことに、少女は疲れ果ててしまいました。

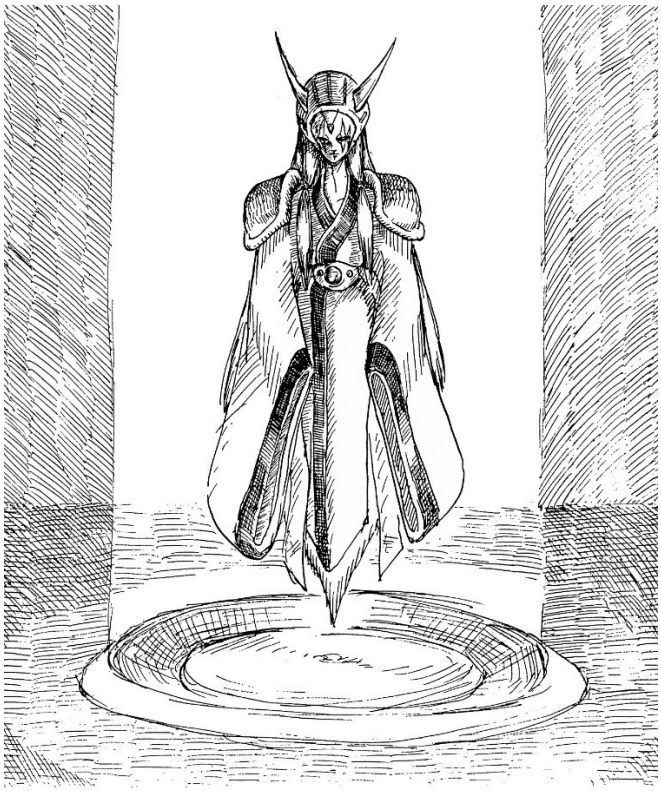
　そんなドロシーにブリキ男が声をかけます。

「たとえ人を殺すことになろうとも、他に道がない以上、進むしかないではないか？」

　ドロシーとかかしとブリキ男とライオンの心は決まりました。

　新たな旅が始まったのです。





ここはウィンキーたちの住む西の国。

その中心にある城の一室に、西の魔女が佇んでいました。

「小娘がこちらに向かってくる……」

魔法陣の中心に立った魔女は、剣を抜いて呪文を唱えます。

周囲の蒼い闇から無数の影が現れた。

「我が影たちよ、侵入者を葬り去れ！」

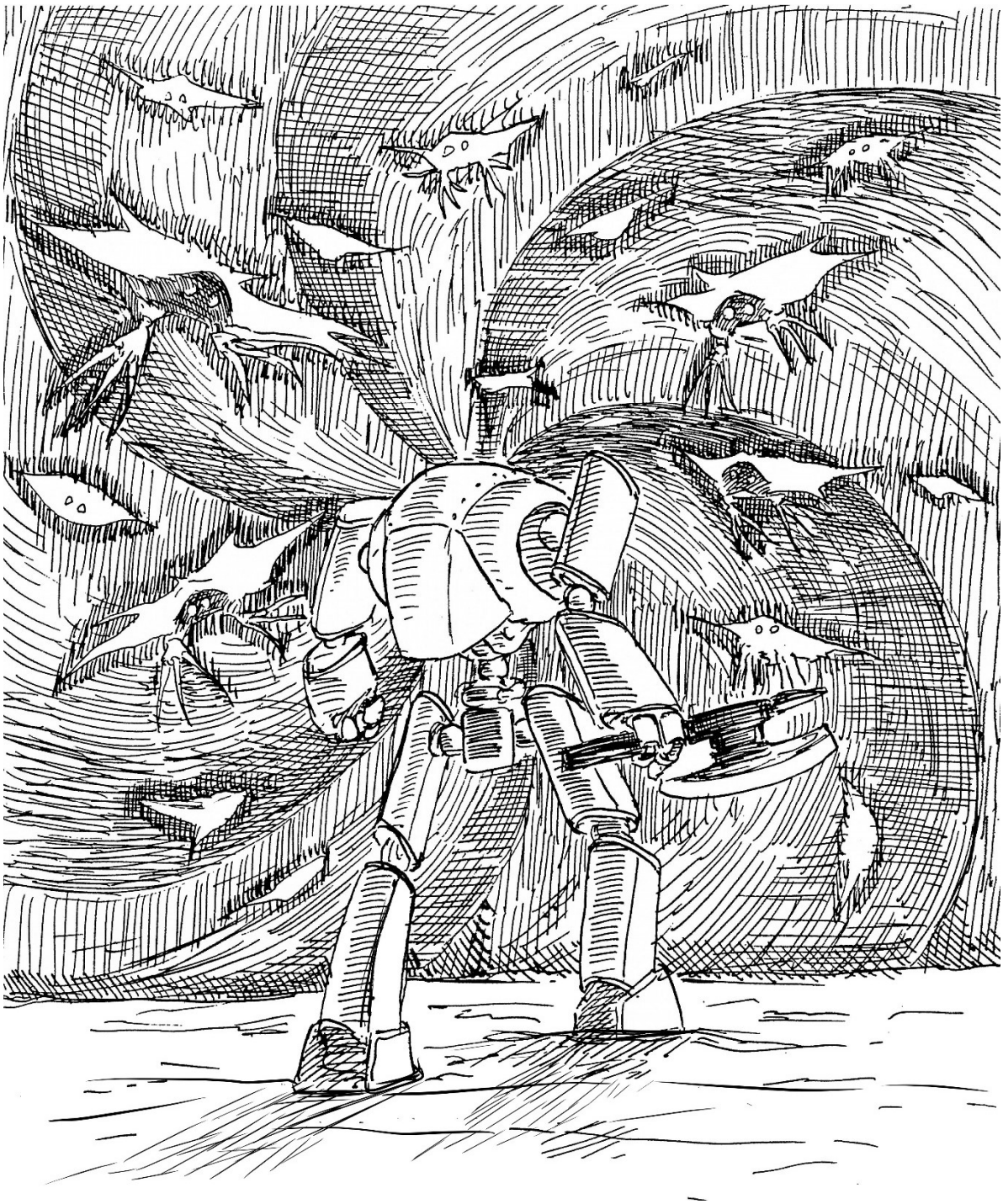
西の城へと向かうドロシーたちの眼前に、無数の影が現れました。

ブリキ男が前に進み出て斧を構えます。

「ここは私にまかせるがいい！　かかしはみんなを護れ！」

影の持つ鋭利な爪も、ブリキ男の体には通じません。

ブリキ男が次々と影を打ち落とす間、かかしは自分の服を広げてライオンとドロシーとトトにかぶせ、影の爪から護りました。



「私の影が滅ぼされるとは……」

魔女が再び呪文を唱えると、かぶっていた金の帽子が輝きました。

暗い室内に羽音とともにたくさんの赤い眼が現れました。

「翼の一族よ、この西の国に小娘とライオンとかかしと、ブリキでできた人間と小犬が侵入してきた。ライオン以外は皆殺しにせい。ライオンは奴隷にするので連れ帰って来い」

ひときわ大きな翼の一族の首領が静かにうなずきました。

空をおおう翼の一族がドロシー一行に襲いかかります。

首領がドロシーに掴みかかったその時、翼の動きがとまりました。

「この娘は北の魔女の聖なる力に護られており、我々には手出しできない。悪しき西の魔女の力は、聖なる力には及ばないのだ」

首領はかかしとブリキ男だけを投石でつぶし、ライオンとドロシーとトトは連れていくことにしました。

翼の一族が飛び去ると、後にはかかしとブリキ男の残骸だけが残りました。

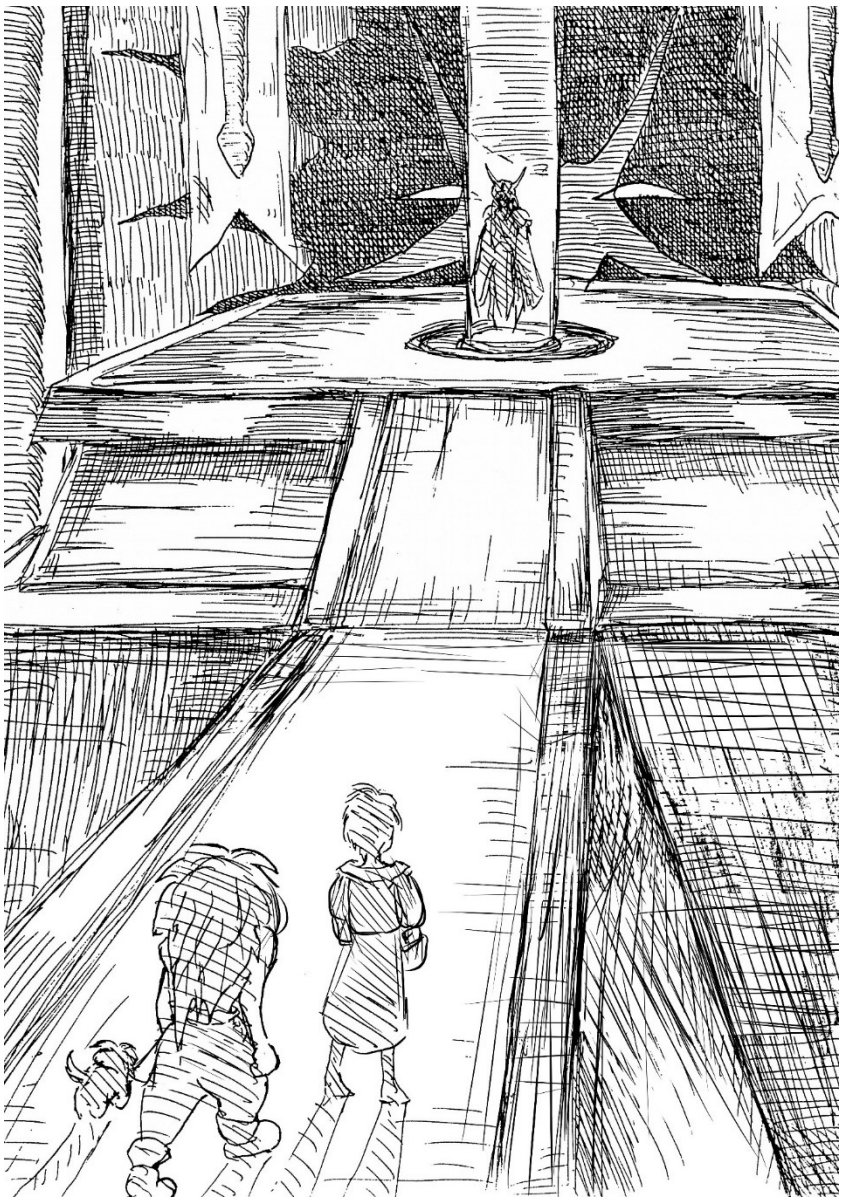
「西の魔女の命、もう長くないことだろう」

少女たちを運びながら、首領はため息とともにつぶやきました。

翼の一族はドロシーとライオンとトトを西の魔女の部屋に通しました。

「我々はできる限りのことはした。後は好きにするがいい」

そう告げると翼の一族はどこへともなく飛び去りました。



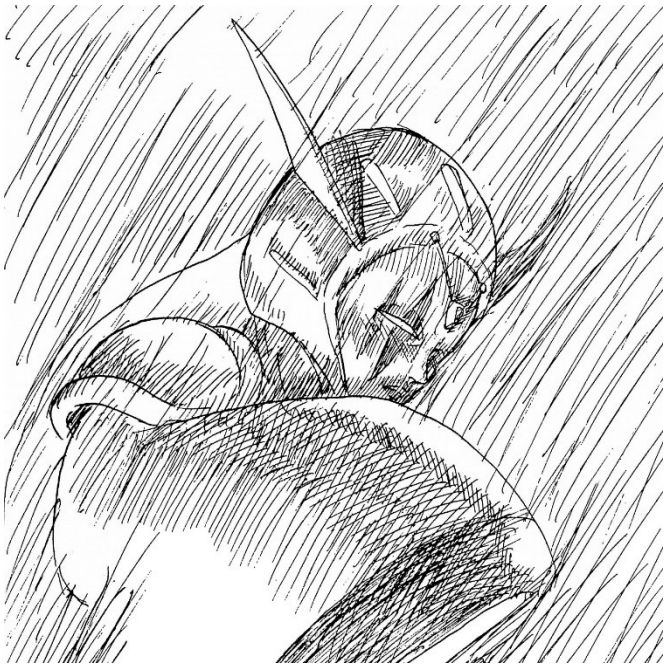
ドロシーの姿を見たとたん、西の魔女は恐怖にふるえはじめました。

少女は「北の魔女の印」と「東の魔女の銀の靴」を持っていたのです。

それがどんな恐ろしい力を生み出すか、この魔女はよく知っていました。

「この娘は早く始末しなければならぬ」

西の魔女は策を弄してドロシーとライオンを召使にしてこき使い、「東の魔女の銀の靴」を騙し取ろうとしますが、ドロシーの勇気と機転には敵いません。



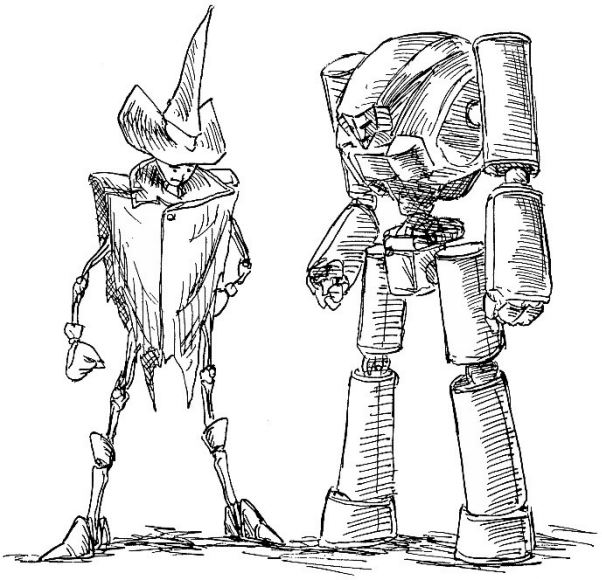
ある時、ふとしたはずみでドロシーが水を浴びせると、西の魔女の体は溶け出し、茶色のドロドロしたかたまりになって、やがて消えてしまいた。

後には魔女の金色の帽子だけが残りました。

ドロシーとライオンとトトが城門を開いてウィンキーたちにこのことを知らせると、長いあいだ西の魔女の奴隷だった人々は喜びました。

ドロシーはウィンキー達に、かかしとブリキ男を修理してもらいました。

特にブリキ男は人々に気に入られ、体をピカピカに磨き上げてもらいました。



ドロシーはこの西の国からエメラルドの都への帰り道がわからないことに気がつきました。

来るときは翼の一族に空から連れてこられたのです。

「それならば、あの金色の帽子を使って翼の一族に命令すればよいですよ！」

ウィンキーの一人が教えてくれました。

ドロシーは呪文を教わり、翼の一族を呼び出しました。

「わたしたちをエメラルドの都まで連れて行ってください」

首領が静かにうなずき、翼の一族が三人と二匹をていねいに空から運びました。

エメラルドの都の人々は、ドロシーたちの生還を、驚きと喜びで迎えました。

一刻も早く望みをかなえてもらいたいドロシーたちは、ろくな休みもとらず、大魔法使いオズの間へ向かいます。

「私たちはお約束のものをいただきに参りました、オズ様！」

ドロシーは続けた。

「わたしをカンサスへ帰してくれるというお約束です！」

「私には脳ミソを！」

「私には心臓を！」

「ぼくには勇気を！」

一同はそれぞれの望みを口にした。

「もうしばらく待ってはもらえないか？」

しかしその声には、以前の威厳の欠片もありませんでした。

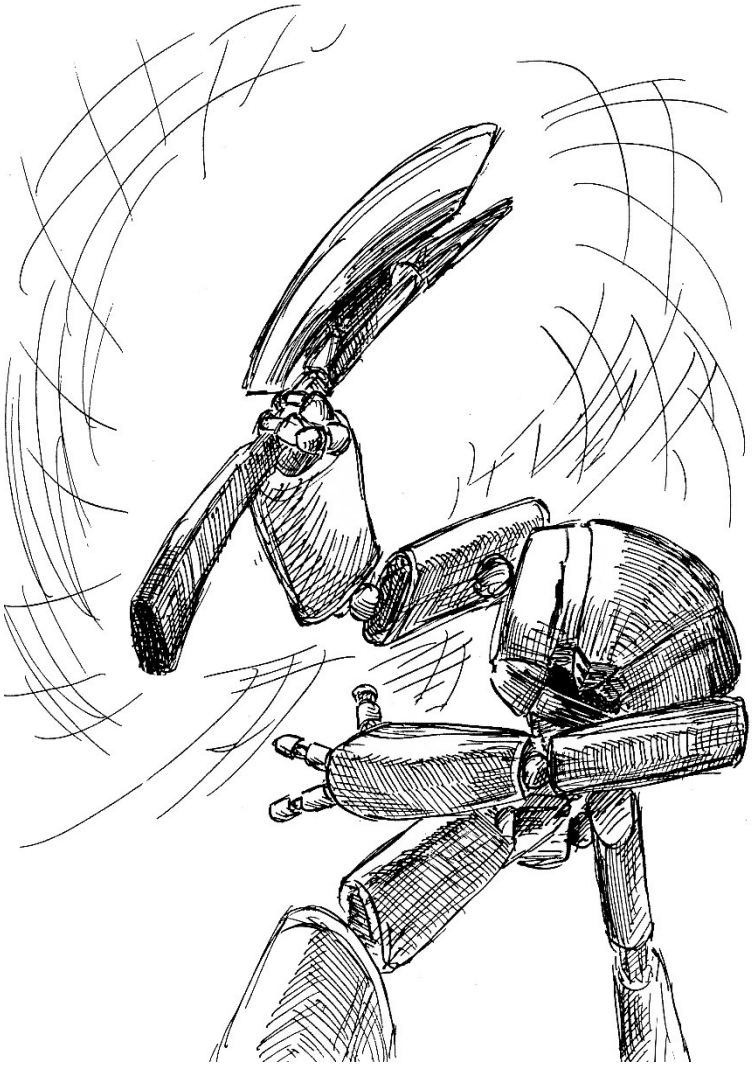
「時間ならたっぷりあったでしょう？」

ライオンが不平を言います。

「……」

大魔法使いの答えはありません。

ブリキ男が何事かに気付いたように前に進み出て、無言でオズの巨大な「顔」に斧を投げつけました。



オズの割れた額から出てきたのは、小さな老人でした。

「説明してもらおうか」

　ブリキ男が低い機械のような声で言いました。

　大魔法使いオズの正体、それは、ドロシーと同じくカンザスから飛ばされてきた、気球乗りの手品師だったのです。

　老人オズはこの見知らぬ世界で生きるため、手品で人々を騙し、大魔法使いのふりをしていたのでした。

「それでは我々の望みは？」

かかしが心配そうにたずねた。

「そのことですが」

老人オズはびくびくしながら言いました。

「明日もう一度ここに来てください」

翌日、かかしとブリキ男とライオンがオズの間に通されました。

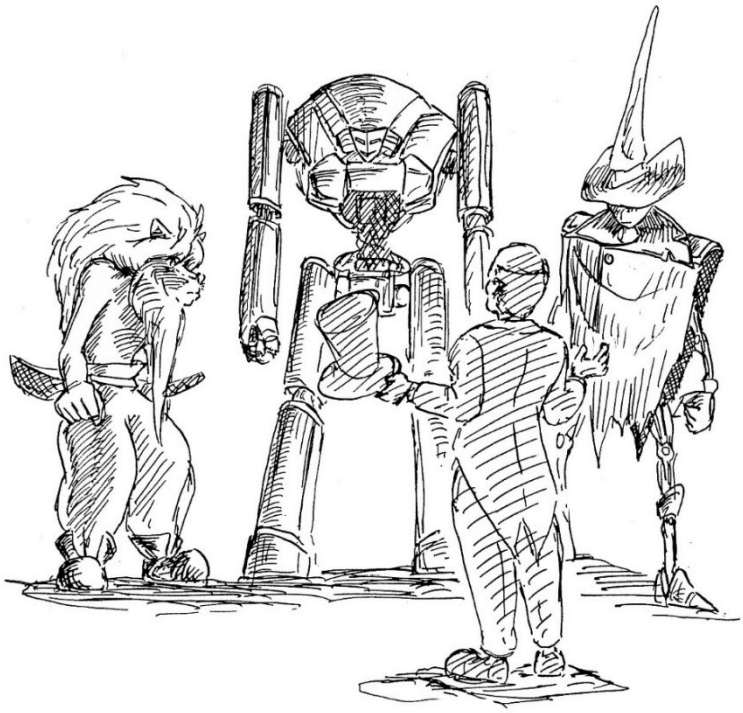
まず老人はかかしの頭をはずし、中身のワラをもう一度つめなおしました。

次にブリキ男の胸に穴をあけ、中にブリキの塊を放り込みました。

最後にライオンに、「勇気の元」と称したただの水を飲ませました。

「さあこれであんたがたの望みはかなったよ！」

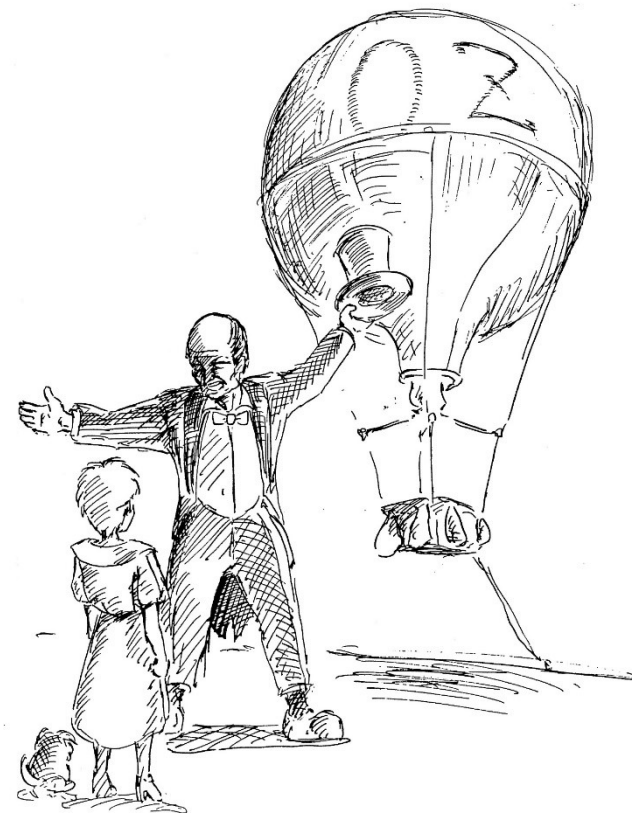
かかしとブリキ男とライオンは、喜んで帰っていきました。



「ウソからマコトを作り出す、これぞ手品師の神髄……」

老人は一人、ニヤニヤしながら見送りました。

「そもそもあいつらは、お嬢さんとの旅の途中、とっくに望む自分を手に入れていたんだよ」



次に老人は、ドロシーを城の奥に連れて行きました。

そこにはいつの日かカンザスへ帰るためにと長年かけて造ってきた気球がありました。

「お嬢さん、わしと一緒にこの気球でカンザスへ帰ろう！」

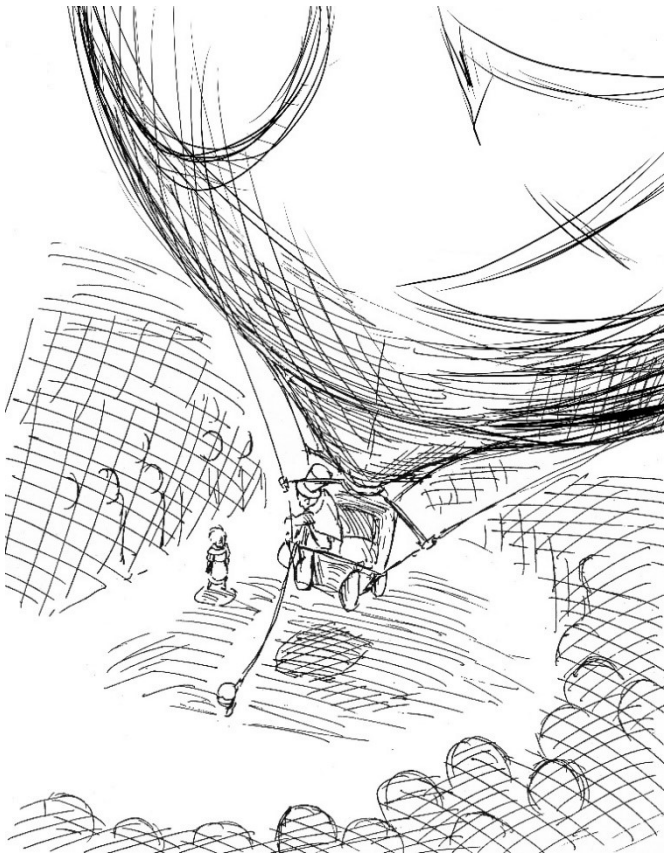
老人オズとドロシーの出発の日が来ました。

エメラルドの都の民は、大魔法使いとの別れを惜しみました。

「私はここから去るが、後のことはこのかかし君に託そうと思う」

人々は「優れた脳ミソ」を持つというかかしが王様になることを、心から喜びました。

ここで異変が起こりました。



群衆の中でチョロチョロしていたトトを抱いてドロシーが気球に乗ろうとしたとき、繋いでいたロープがぷつんと切れたのです。

呆然と立ち尽くすドロシーを残し、気球はどんどん舞い上がっていってしまいました。

ドロシーはまた途方にくれます。

「もしあなたがこのエメラルドの都で暮らしてくれるなら、みんな喜ぶだろう」

ブリキ男の心づかい嬉しいと思いましたが、ドロシーはあきらめきれません。

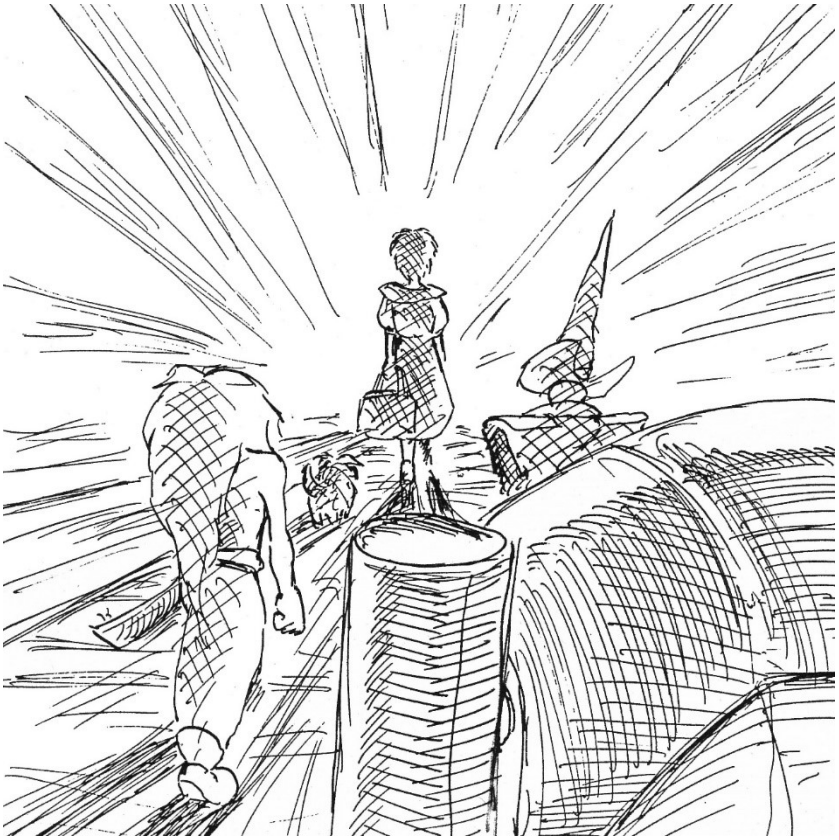
「どうしても帰りたいなら、後は南の聖なる魔女グリンダを頼るほかないでしょう」

結局ドロシーは、門番のその言葉に従うことにしました。

出発のとき、エメラルドの都の王様になったかかしが言いました。

「私の今の幸せはあなたのおかげだ。私もまたお供させてください」

こうしてドロシーとかかしとブリキ男とライオンとトトの、最後の旅が始まりました。

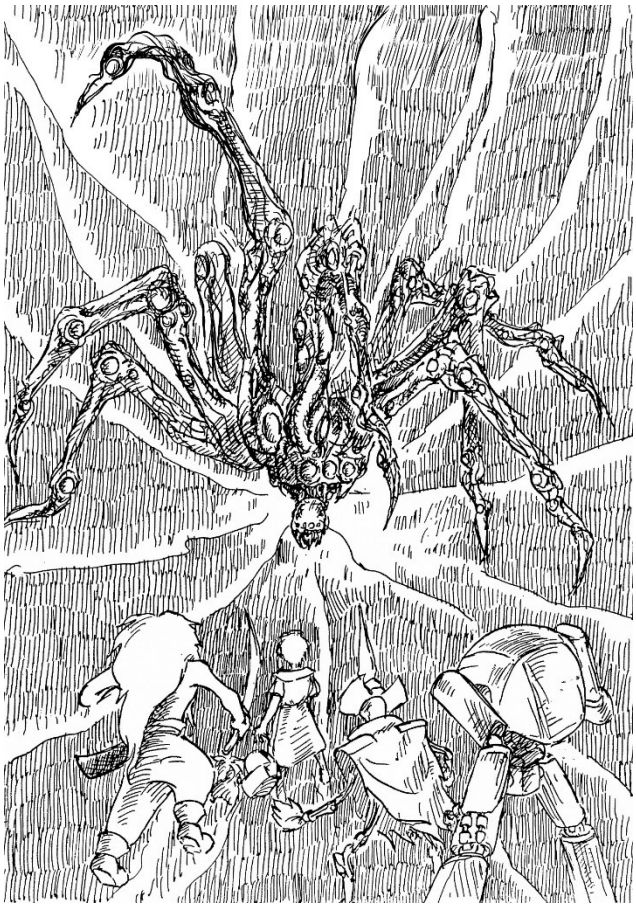


南の魔女グリンダの城に行くには、深い森を抜けなければなりません。

森の半ばまでさしかかったとき、行く手に巨大な蜘蛛の怪物が現れ、襲いかかってきました。

ライオンは手にした剣と勇気を武器に蜘蛛と闘い、あっという間に首を切り落として止めを刺してしまいました。

するとあたりからゾロゾロと森の動物たちが集まってきた。みんなこの蜘蛛に怯えながら暮らしていたのでした。



「勇敢なライオン様、どうか我々の王になってください」

こうしてライオンは旅が終わった後、獣の王になる約束をしました。

三人と二匹の旅人は森を通り抜け、切り立った崖にたどり着きました。

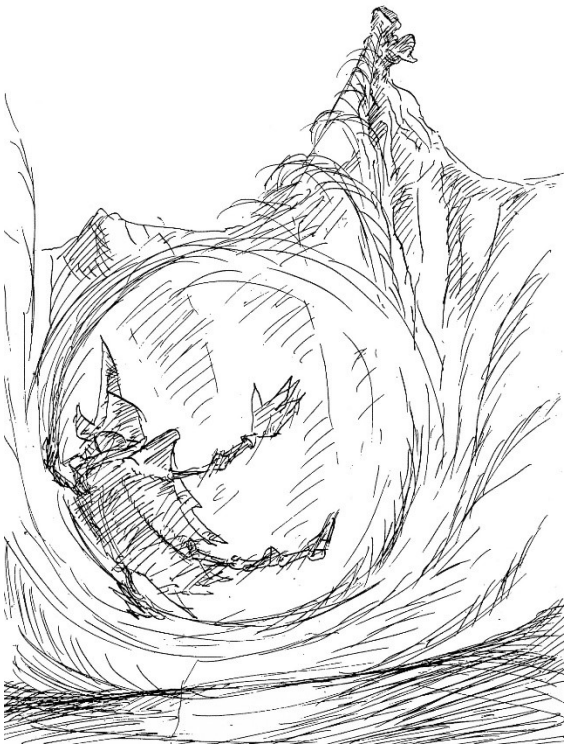
そこは南のカドリングの国への最後の難所でした。

この難所を越える方法を思案する一行に、崖の上から声がかかります。

「旅の少女とその仲間たちよ、私は南の国の番人である。許可なくここを通すわけにはゆかぬ！」

それは岩から生えた手も足も無い人間でした。

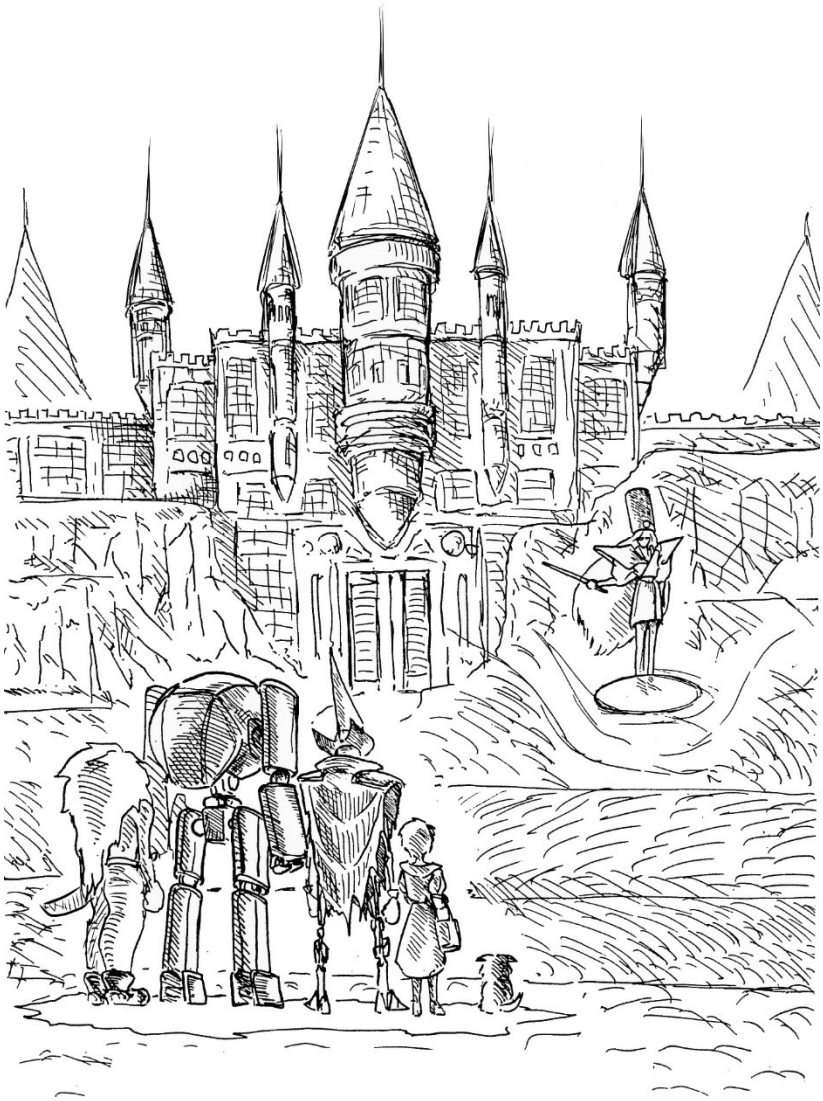
かかしが強引に登ろうとすると……



ドロシーはまた、翼の一族の助けを借りることにし、バスケットから金色の帽子を取り出して、呪文を唱えました。

一行はついに南の魔女グリンダのいるカドリングの街に着きました。

グリンダの城の門前に立つと、赤い服の女兵士がドロシーたちを迎えます。



ドロシー一行は、魔女グリンダに謁見しました。

ドロシーは今までの身の上、竜巻で飛ばされてきたこと、たくさんの友だちと出会えたこと、数々の冒険などを、あまさず語りました。

「今のわたしの一番の望みは、カンザスに帰ることです」

グリンダはこの心やさしく勇気ある少女をじっと見つめて言いました。

「あなたの望みをかなえるには、その金色の帽子を、私にくれなければならない」

「そんなことなら喜んで！」

ドロシーは帽子を献上しました。

次にグリンダは、かかし、ブリキ男、ライオンに声をかけました。

「あなた方はこの少女が帰ってしまったらどうするのですか？」

かかしが答えました。

「私はエメラルドの都に帰って王様になります」

ブリキ男が答えました。

「ウィンキー達が私にとてもよくしてくれた。悪い魔女の死後、西の国を治めてくれと頼まれている。できることならあの人たちのめんどうをみてやりたい」

ライオンが答えました。

「ぼくは動物たちの王様になると約束しました。あの森で一生幸せに暮らせるでしょう」

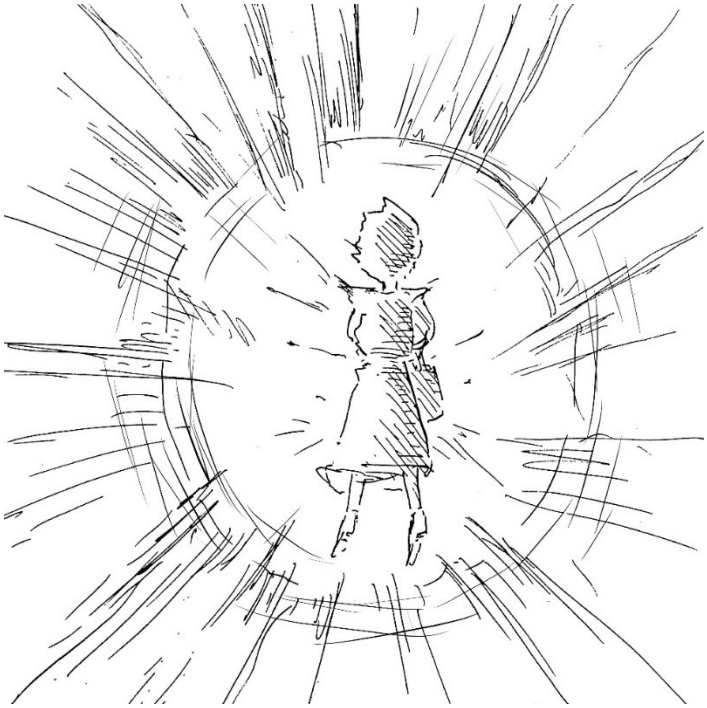
「それでは私はこの金色の帽子を使って、あなた方をそれぞれの場所に送りましょう。それが済んだらこの帽子は翼の一族にあげてしまおう。そうすればあの一族は永遠に自由です」

ドロシーはグリンダのはからいを心から喜びました。

「最後にあなたが帰る方法を教えましょう」
　グリンダはドロシーのはいている銀の靴を指さし、気の毒そうに言いました。
「その靴があなたをカンザスに送ってくれるでしょう。その靴はどんな場所へでも三歩で運んでくれる力がある。もしあなたがそれを知っていたら、この国に来たその日に帰ることができたのに……」
「いいえ！」
　ドロシーは笑顔で答えました。

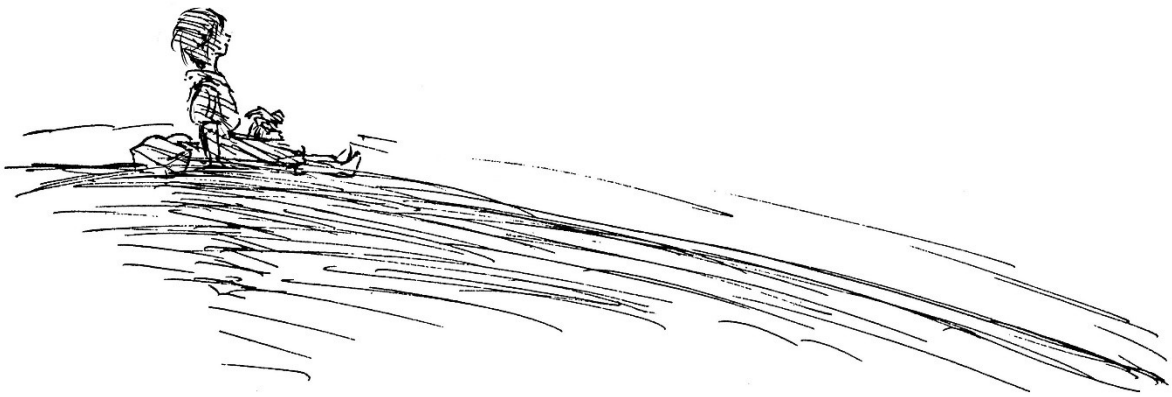
「もし私がその日のうちに帰っていたら、かかしさん、ブリキ男さん、ライオンさん、それに多くのこの国の人たちの幸せはなかったでしょう！　きっと北の魔女さんはそうなることを願って、銀の靴の力をわたしに黙っていたんです！」

　ドロシーは仲間たちに別れを告げ、靴のかかとを三回鳴らしました。



ドロシーは草原の真ん中で目をさましました。

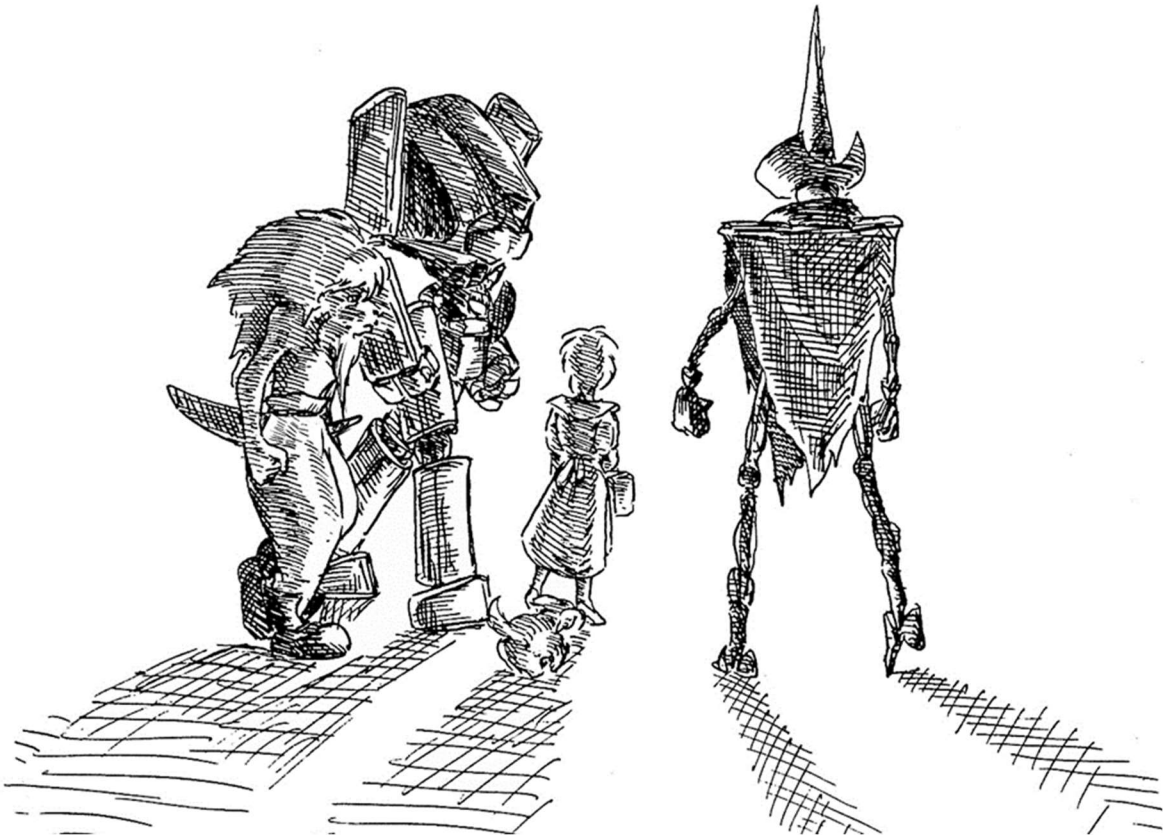
気がついてみると銀の靴は消え、裸足でした。



ドロシーはふと自分の額に手をやりました。

指先に感じる不思議なあたたかさに、少女は遠い国の友人たちを想いました。

虹色の不思議の国の冒険の日々は夢と消え、ドロシーは灰色だけれども懐かしのわが家へと急ぎました。



絵物語『オズの魔法使い』

1987 年作、2024 年再編集